

# 黒豹注意報 7

～そして、純情OLタンポポは…～

*Y u k a & K a z u m a*

---

京みやこ

*Miyako Kyo*

*termity*



エタニティ文庫

## もくじ

黒豹注意報 7	5
番外編 笑顔と愛を花束に込めて	287
書き下ろし番外編 甘く賑やかな竹若夫婦の日常	311

黑豹注意報 7

## 前巻のあらすじ

夏の気配を感じ始めた七月。

私、小向日葵ユウカは、彼氏である竹若和馬さんのマンションで一人、休日を通り越して来た。

リビングでノートを広げ、ボールペンを握る。これは彼と出逢ってからの日々を綴っている日記帳である。和馬さんに見られるのは恥ずかしいので、彼が休日出勤している今日は、日記を書く絶好のチャンスだ。

私が勤めている文具メーカーは、新年度から数ヶ月経った今、全社的に仕事が落ち着いている。

それなのに、なぜ同じ会社で働く彼が出社しているかというところ——

先月、和馬さんは一時記憶喪失になり、しばらく休んでいたことで仕事が溜まっているから。とはいえ、彼の上司である社長は、まだ無理をするなど言っている。

今では記憶や体調に問題はないけれど、和馬さんは入院したことで迷惑をかけてし

まったと気にしているらしく、これまで以上に仕事に精を出しているのだ。

和馬さんが記憶喪失になったのは、社長を庇って負傷したことがきっかけだった。社長はそのことを申し訳なく思いことさら氣遣っているようだけど、和馬さんに見てみたら体を張って社長を警護することも仕事だし、そのことでわだかまりを抱いている様子はない。

和馬さんの口からそういった話を何度もしているようなのだが、社長の心配性は今なお続いている。数日前に私が社内報の件で社長室を訪れた際も、和馬さんがバリバリ働く様子を洗い顔で眺めている社長を見かけた。

穏やかな表情で静かに仕事を進める和馬さんの様子に、おかしなところはなかった。特に無理をしている素振りも見受けられない。

だけど、周りの人は、やはり気が気ではないのだ。過労やストレスによって、脳に悪影響を与える可能性もあるのだから。

ここで私は、和馬さんが入院した病室を訪れた時のことを思い返す。

『ところで、こちらの女性はどなたですか？』

和馬さんは、ここ三年の出来事を覚えていなかった。つまり私と出逢ってからの記憶を、すっぱり失っていて……

『私と親密になる機会を窺っているのであれば、それは無駄です。どうぞ、お引き取り

ください」

病室を訪れた私を、自分に取り入ろうとする迷惑な女性と認識したのだ。その態度は、まったく取り付く島もなし。彼は全身で私を拒絶していた。

その衝撃は大きく、はじめの数日間は、悲嘆と絶望に満ちていた。

和馬さんに忘れられたことがつらくて、拒絶されたことが悲しくて、思い出してもうえないことが寂しくて。いったい、何度泣いたことだろうか。

もう二度とあんなことは起きてほしくないけれど、あの出来事があったからこそ気付けたことがたくさんある。それで私の心も固まり、和馬さんとの結婚に向けて大きく踏み出せたのだから、悪いことばかりではなかったのかもしれない。

……って思わないと、苦しくなるからね。あの時のことを思い出すだけで、いまだにジンワリ涙が浮かぶ。

とはいえ、私一人では絶対に乗り越えられなかったとも思う。

和馬さんのお母さんの優しい言葉や、社長の励まし、中村留美先輩なむらるみの言葉にも力をもらった。

『あの独占欲大魔王が、そう簡単にタンポポちゃんとのことをなかつたものにするはずがないわ』

和馬さんと長年の付き合いがある留美先輩にそう言われると、わずかながら前向きに

なれた。

少しずつでもいいから、焦らずあせに。こういう時こそ彼を支えてあげるべきなのだと自分に言い聞かせて。

……それから、おじいちゃんの形見のカメラも後押ししてくれた。

宝物であるカメラは、一度は私の手を離れてしまったけれど、和馬さんが危険を顧みかえりず、取り戻してくれたものだ。そのことを思い出した時、私は彼の大きな優しさと深い愛情に、改めて気付いた。

そして私は、理解した。『好きという感情の先にあるものが、無条件で相手に寄り添いたいという想いだ』ということ。

そのことに気付かせてくれたのは、他でもなく、過去の和馬さん。それはまるで、時間差で仕掛けられた愛情の爆弾だった。

そうして、和馬さんは奇跡的に記憶を取り戻して——私は彼に逆プロポーズした。

『私を和馬さんの妻にしますか？ それとも、和馬さんが私の夫になってくれますか？』『妻になる人』の欄がすでに記入されている婚姻届を目にした時の彼は、これまでに見たことがないほど驚いていて、私のサプライズは大成功！

いよいよ結婚に向けて本格的に動き出したのだった。

「サブライズが成功したのはよかったけど、あのあと思い切り抱き締められてキスされて、大変な目に遭ったんだよね……」

ポツリと呟いた私は、ボールペンのお尻でカリカリと頭を掻く。そこに、「なにをしているのですか？」と声がかかった。

「ひゃっ!? か、和馬さん、帰っていたんですか!？」

集中するあまり、休日出勤していた彼が帰ってきていたことに気付かなかった。

「つい先ほど。部屋がずいぶん静かなので、ユウカが寝ているかと思いい、ソツと入ってきたのですよ。一応、何度か声をかけましたがね」

彼は目を細め、優しい微笑みを向けてくる。

「そ、そうでしたか。ちょっと夢中になっていて、はは、はははっ」

苦笑しながら、慌ててノートを閉じた。

思うままに書いているので、人様に見せられるようなものではない。彼に気付かれないうよう、ローテーブルの下にノートを隠す。

そんな私の態度を気に入った風もなく、和馬さんはニッコリ笑った。

「お土産です。あなたが大好きなプリンですよ」

差し出された箱には、有名店のロゴがプリントされている。私はすぐさま、その箱に飛びついた。

「ありがとうございます!」

満面の笑みを浮かべて箱を受け取る私の横を、和馬さんが素早く移動する。そして、私が隠したノートを手に取った。

パラパラとページをめくる彼に気付き、私は慌てふためく。

「あーっ! 返してください!」

プリンが入っている箱をテーブルに載せ、すぐさまノート奪還へと向かう。

しかし、異常なほど反射神経がいい彼からノートを奪い返せるはずもない。頑張って手を伸ばしても、和馬さんはヒョイヒョイと避けてしまう。

「和馬さん、返してくださいよ!」

その声を上げるも、彼はノートを持つ右手を高々と上げた。

——ずるい、これじゃ、届かないではないか。

それでもめげずに手を伸ばしてジャンプしていると、和馬さんがニコッと笑う。

「ノートを返してほしかったら、私に『おかえりなさいのキス』をしてください」

「はあっ!? なに言ってるんですか!」

「おや、返してほしくないのですか? では、全部読んでしまいますよ?」

「やめてー! 読まないでー!!」

相変わらずドタバタしていますが、今日も私たちは仲よし(?)です。

## 第一章 未来へのスタートライン

## 1 どんな私でも

仕事に恋愛にと全力投球していたら、あつという間に時間が過ぎていった気がする。来月の八月八日で、私は二十二歳だ。

「去年、和馬さんにネットクレスをもらってから、もう一年経つのかあ」

アパートの階段を降りながら、私はしみじみ眩つふやいた。

同じ部署の社員たちだけで誕生日を祝ってもらうことになっていたのに、和馬さんが花束持参で乱入してきたのも、今となってはいい思い出だ。

首元で揺れるネットクレスに触れながらふと周りを見回すと、夏らしい様相ようそうを呈ていしている。

公園や各家庭の庭先でもひまわりが元気に育ち、目にも鮮やかな黄色い花を太陽に向けていた。

日差しや気温の変化を感じたり、夏の花を見たりすると、『ああ、夏が来たんだなあ』

と思う。

私は大輪のひまわりをしばらく眺めてから、いつものように会社へと向かっていった。

「おはようございます！」

週明けの月曜日、私は咲き誇るひまわりに負けなくらい元気よく挨拶あいさつをして総務部に足を踏み入れる。こうやって大きな声を出すことで、『今日も頑張るぞ！』と自分に気合いを入れる意味もあった。

総務部広報課に配属されて一年と三ヶ月が経ち、任される仕事の量も責任も増えた。可愛い後輩たちもできて、彼らの前では頼り甲斐かひのある先輩でいたいと思っている。

『さすが、小向日葵先輩ですね！頼りになります！』

『私、先輩に一生ついていきます！』

『先輩を見習って、俺も立派な社会人になってみせます！』

なんてね。……残念ながら、いまだに言われたことはないんだけどさ。

そんなことを考えながらデスクに向かうと、先に出勤していた人たちが口々に挨拶あいさつを返してくれた。

「おはよう、タンポポちゃん。相変わらず、元気ね」

「夏バテ知らずで、本当にうらやましいわ」

「やっぱり、若さかしら」

私を見た先輩たちが、微笑みを浮かべている。

こうした平穏な日常のありがたみを、最近はつくづく感じていた。

自分の席に着くと、私は荷物を置き、社長室に向かう。今日は社内報の件で打ち合わせをすることになっているのだ。

「和馬さん、今日も朝から山ほど仕事をしているんだろうなあ」

社長室の前に着いた私は、ノックする前に小さく眩つばやく。

その時、ここ最近ですっかり聞き慣れたセリフが室内から聞こえてきた。

「おい、竹若。その仕事は急ぎじゃないから、明日に回して構わないんだぞ」

そんな社長に、和馬さんがすかさず言葉を返す。

「ですが、こちらの書類を片付けてしまわないことには、どうも落ち着きませんので」

淡々と言い返すセリフも、同じように聞き慣れてしまったものだ。

「それなら、他の秘書たちに手伝ってもらえ」

「いえ、彼らには別件で緊急の仕事を頼んでおります」

「戻ってきたら、手伝わせばいいだろうが」

「それほど難しい案件ではありませんから、私が今やれば彼らが戻ってくる前には片付きます」

「ああ、もう！ 病み上がりでバリバリ仕事をこなす部下は、どうやって止めたらいいんだよ！ 仕事をしないっていうなら、いくらでも怒鳴りようがあるのに！」

——んー、今日も心配されるほど仕事をしているのかあ。

でも、和馬さんの声には張りがあり、体調を崩している様子はない。

そのことにホッと胸を撫なで下ろしながら、社長室の扉をノックした。

「広報課、小向日葵です」

「ああ、入ってくれ」

社長の返事と共に、扉が静かに開いた。

開けてくれた和馬さんに、ニコッと微笑みかける。

「お疲れ様です」

言葉をかけながら、念のため、注意深く彼の様子を窺うかがう。顔色は悪くないし、足元もふらついていないから、とりあえず大丈夫だろう。

「ユウカもお疲れ様です。社内報の件で、打ち合わせでしたよね。どうぞ、中へ」

「はい、失礼します」

ペコリと頭を下げ、中に入る。

自分の席に座って書類をめくっている社長にも、頭を下げた。

「小向日葵君、五分ほど待っててくださいないか」



「かしこまりました」

私は促されて応接用のソファへ腰を下ろしたのだが、その時、和馬さんの机上有る花瓶が目に入った。

それは、以前に私とお揃いで買ったものだ。

私の花瓶は、あの日、和馬さんの怪我を知らせるかのように大きくヒビが入ってしまったから、もう生花を入れるわけにはいかない。けれど今、和馬さんがしているみたいにドライフラワーを入れる分にはまだ使えそうだった。

——捨てちゃうのは、まだもったいないよねえ。

そんなことを考えていたら、和馬さんが静かに声をかけてきた。

「どうしました？」

アイスカフェオレが注がれたグラスを私に差し出しながら、和馬さんが軽く首を傾げる。

私の花瓶にヒビが入ってしまったことをすっかり伝え忘れていたので、そのことについて彼に話す。

それを聞いた和馬さんは、困ったような笑みを浮かべた。

「そうでしたか。捨ててしまうには、やはりもったいないですね」

私はコクンと頷き返す。

ただの花瓶ではなく、彼とお揃いだからこそ、簡単に捨てたくない。それは、和馬さんも同じ気持ちのようだ。

しばらく花瓶を見つめていた和馬さんは、おもむろに口を開く。

「ですが、いずれヒビが大きくなって、割れてしまうかもしれません。その時に、破片で怪我をしないとも限りませんよ」

「あっ、そうですね」

確かに、彼の言う通りだ。私が怪我をするのは自業自得だけど、万が一、私以外の人に怪我をさせてしまつてからでは遅い。ガラスの破片で切った傷は、案外深くなるものだ。

「分かりました、あの花瓶は片付けます」

私の言葉に、和馬さんが優しい笑顔と共に頷き返してくれた。

「きちんと感謝をして、花瓶を処分しましょうね」

「はい、そうします」

そう決めたところで、次の問題が浮かび上がってくる。

「和馬さんが使っているものは、問題ないですよね。これと同じ花瓶が、まだ売っているといいんですけど」

この花瓶は、留美先輩の友達が経営しているセレクトショップで買ったものだ。

私たちが行った時には十個ほどあったけれど、今も在庫があるかどうかは分からない。

——せっかくだから、和馬さんとお揃いの花瓶がまたほしいんだけどなあ。そんな私の胸の内に気付いた彼が、腕を伸ばして私の頭にボンと優しく手をのせた。「こちらは、いったん部屋に持ち帰ります。売り切れだった時は、これとは違うデザインでお揃いの花瓶を買きましょう」

デスク上の花瓶から和馬さんに視線を戻すと、柔らかい笑みが向けられる。

「私たちは違う部署で働いていますので、社内で顔を合わせる機会は限られています。ですから、せめて同じアイテムを持つことで、あなたに会えない寂しさを和らげたいのですよ」

私の気持ちを見透かしたような言葉に、なんだか照れくさくなってしまった。

だけど同じように考えてくれていたことが嬉しいから、私も笑顔を返した。

「はい、そうですね」

お互いに微笑みを交わしていたら、やたらと大きな咳払いが聞こえてきた。

「うおっほん！」

それを聞いて、私はハッと我に返る。慌てて和馬さんから距離を取り、背筋をピシッと伸ばした。

——いけない。和馬さんの笑顔に見惚れて、一瞬、ここが社長室であることを忘れてしまったよ。

「す、すみません、社長！」

ペコペコと頭を下げる私の横で、和馬さんは余裕顔だ。

「社長の仕事が片付くまで場繋ぎをして差し上げましたのに、相変わらず、無粋な方ですね。部下の恋愛を邪魔しますと、馬ではなく、この私に蹴られますよ。よろしいですか？」

不機嫌も露わに目を細める彼に対し、社長はフンと鼻を鳴らした。

「職場で、しかも上司の前で、堂々といちやつくお前が悪いんだろ。それに、小向日葵君は俺に用事があったて来たんだ」

手招きしながら呼び寄せる社長に向けて、私は急いで立ち上がり足を踏み出す。

そんな私に、うしろから伸びてきた腕が絡み付いた。

「きゃっ」

驚いた私は踏ん張ることができず、引かれるままに体を大きく反らしてしまう。

背中に広い胸が当たったと同時に、すっぽりと包み込まれてしまった。

「か、か、和馬さん!？」

目を白黒させる私に対し、彼はいつものように飄々とした表情を社長に向けていた。

「愛してやまない恋人を前にしたら、甘い言葉の一つも出てくるものです。……ああ、寂しい片想いを続けている社長には、私の気持ちを理解するのは難しかったですね。ま

たしても、失礼いたしました」

さすがにこれには社長も腹を立てたようで、拳で勢いよくデスクを叩いた。「たーけーわーかーわー！」

ドンという鈍い音に重なり、低く大きな声が室内に響き渡る。今日も今日とて、賑やかな社長室だ。

怒鳴る社長と、静かに言い返す和馬さん。騒がしい光景だけど、ある意味ホツとする。彼が記憶喪失になる前と、まったく変わらない光景。

それもこれも、心が広い社長のおかげだろう。

——そうだ。私も社長にはお世話になっているし、一輪挿しを二つ贈ろう。そのうちの一つを社長も片思い相手にプレゼントしたら、会話のネタになるかもしれないね。

二人の様子を苦笑しながら眺めていた私は、そんなことを考えていたのだった。

その後、私は社長を必死に宥め、この部屋に来た目的をどうにか果たした。

それから総務部に戻って一日の仕事をきちんと終え、終業後の今、和馬さんの部屋を訪れている。彼と一緒に帰ってきたのだ。

リビングに向かった私は、ローテーブルの上に和馬さんが会社で使っていた花瓶を置く。

挿していたミニひまわりのドライフラワーも一緒に持ち帰ってきた。

私は床に座り込み、花びらを指で突つつく。

彼が退院してからずいぶん時間が経っているけれど、花の状態はかなりいい。生花ほど手入れが大変ではないものの、ホコリや湿気に注意は必要だ。

——和馬さん、大事にしてくださいな。

入院中も、職場に復帰した後も、彼のそばにあるミニひまわり。これから先は、この部屋で和馬さんのことを見守ってほしい。

彼はなにかと無茶をする人で、しかも大変だということを顔にも言葉にも出さないから、鈍い私には察するのが難しかった。

忙しくて大変な毎日を送る彼にとって、ほんの少しでもこの花が安らぎになってほしいと願う。

——今、振り返ってみても、和馬さんの入院中は、本当に色々なことがあったよね。

ミニひまわりを眺めながら思い出していると、スーツの上着を脱いだ和馬さんが私の横にストンと腰を下ろす。

「そんな難しい顔をして、なにを考えているんですか？」

「和馬さんが入院していた時のことを思い出していました。もう結構経っているのに、つい昨日のこのようで」

私はもう一度花びらを指で突つつき、フツと口角を上げた。すると、心なしか和馬さんの声の調子が暗くなる。

「それだけ、ユウカの心の中に残っているということでしょう。あの時は、本当に心配をかけましたね。すみませんでした」

私は顔を上げ、複雑な表情を浮かべている和馬さんを見つめた。

「すっかり元気になったじゃないですか、謝ってもらうことじゃないですよ。それに和馬さんが記憶喪失になったことで、私は本当の意味で自分の気持ちと向き合えたから、悪いことばかりじゃなかったと思っっています」

「そうですか？」

不安そうに私を見る彼に手を伸ばし、艶々の黒髪をソツと撫でる。今では跡もすつかり消えたけれど、怪我をした辺りを優しく数回撫でた。

「はい。ただ、和馬さんが怪我をしたことは、最悪でしたけどね」

微笑みかけると、長い腕が静かに伸びてきた。

絡めとるような、閉じ込めるような、そんな抱擁だ。力はそんなに強くないけれど、私の体を包み込む腕には確かな意思を感じる。

和馬さんがまとうシトラス系のコロン、逞しい腕の感触、布越しに伝わる体温、それらを感じることで、私の居場所がここなのだと実感する。

——この腕の中に戻ってこられて、本当によかったなあ。

私は安心して彼の胸に体を預けたのだった。

翌日以降もみっちり仕事をして、迎えた土曜日。私たちは例のごとく、デートをしている。今日の目的は、お揃いの一輪挿しを買うことだ。

和馬さんが運転する車が、セレクトショップの駐車場に入る。停車後、私は急いでシートベルトを外し、助手席を飛び出した。

「和馬さん、早く、早く！」

途中で振り返り、優雅な仕草で運転席から出てくる彼を手招きして呼ぶ。

「そんなに慌てるよ、転びますよ」

クスクスと笑いながら歩いてきた彼が、スツと私の右手を握り締めた。

「だって、こうしている間に売れてしまうかもしれないから」

ゆったりと構えている和馬さんを引つ張るようにして、私はどんどん足を進める。

そんな私の様子に、彼はさらに笑みを深くした。

「ですが、駐車場には他の車はありませんし、客は私たちだけではないでしょうか。それに、たった今、開店時間になったばかりではありませんか」

「いいえ、徒歩で来るお客さんだっているはずですよ」

そう言い返したところで、女性三人が店内へと入っていく姿を目にする。  
 「あっ！ ほら、先を越されました！ 和馬さん、行きましよう！」  
 グツと強く彼の手を引き、私は小走りで進んだ。

店に入った私は、当然のことながら花瓶売り場へと向かった。

「あれえ、ないなあ」

お目当ての花瓶はいくら探しても見つからないので、店員さんを呼んで在庫を確認してもらおう。

私は花瓶の画像をスマートフォンに表示させ、それを店員さんに見せた。

「この一輪挿しを買いに来たんです」

すると、店員さんは申し訳なさそうな表情をする。

「そちらの商品は、すべて売り切れになっておりまして……」

できたら買ったかったけれど、やはり、いい物は売れてしまうのだ。予想していたものの、ちょっと残念である。

とはいえ、留美先輩おすめのこのお店は、他にも素敵なのがたくさん売っている。店員さんにお礼を言って、気を取り直した私は別の花瓶を探し始めた。

じつくりと眺めているうちに、見覚えのあるイラストが描かれている花瓶を目にする。

白地の陶器とうきに、タンポポと黒豹がそれぞれ描かれていたのだ。

「和馬さん、これ！」

手に持った花瓶を見せると、彼はフワリと微笑んだ。

「ああ、私たちが持っているマグカップと同じイラストですね」

「うわあ、これにしようっと！」

別々のイラストなので、他の人からしたら対たいになっているとは気付かないだろう。だけれどタンポポというあだ名の私と、黒豹みたいな和馬さんなので、私たちからすると一つで一つ。私は即座に購入を決めた。

「素敵に一輪挿しが見つかって、よかったですね」

和馬さんの言葉に、私も笑顔になる。

「はい、前回の花瓶と同じくらい気に入りました」

「では、会計を済ませましょうか」

レジに向けて私の背中をソツと押す和馬さんに顔を向けた。

「ちょっと待ってください、社長にも買っていただきたいんです」

それを聞いた和馬さんの片眉が、ヒョイと上がる。

「社長にですか？」

怪訝けげんな表情を浮かべる彼に、私はクルリと半回転して向き直った。

「はい、色々お世話になってますから」  
 社長が社内報に協力的なので、とても仕事がやりやすくて助かっている。  
 時々手土産のお菓子をおすそ分けしてもらっていることも、お礼をしたいという大きな要因であった。

何度も感謝の言葉を口にしてきたけれど、形があるものでお返しをしたことはなかった。ことあるごとに、社長が『礼は気にするな』と言うからだ。

それならいっそのこと、社長が片想いをしているという女性に写真を撮らせてもらい、それをプレゼントしようかと考えたこともある。カメラの腕はそこそこ自信があるし、社長も絶対に喜んでくれるだろう。

まあ、実現には至らなかったけどね。

もし実行するとしたら第一関門として、その女性の名前を聞き出す必要があった。社長がすぐに教えてくれるとも限らないし……難しい計画だったのかもしれない。

「なにもいらないと言われていきますけど、やっぱり一度くらいは社長にお返ししたくて」  
 しかし、私の説明を聞いても、彼の眉は元の位置に戻らなかった。それどころか、ますます腑に落ちないという感じに角度が険しくなっていく。

「ユウカが社長を気遣う必要はないのですよ。社員の仕事が円滑に進むよう、上司が働きかけることは当然の務めです。それに、手土産のおすそ分けは、社長のほうがあなた

に助けてもらっているのですからね。おかげで、いただいた食べ物が無駄にしないで済んでいますよ」

そうかもしれないが、もらえばなしなのは、なんだか居心地が悪い。

どうしたら和馬さんを説得できるものかと、少し考え込む。

手にしている二つの一輪挿しに視線を落とした時、妙案が舞い降りた。

「あ、あの……、プレゼントしたいのは社長の片想いが実るようになって願掛けの意味もあるんですよ。ええと、その、私たちはすごく仲がいいから、それにあやかってもらおうかなって」

それを聞いた和馬さんの眉が、ようやく元通りになる。

「なるほど、ユウカは優しいですね。……私たちの仲のよさにあやかるところで、あの方の片想いが実るとは思いませんが。まあ、いいでしょう」

この時、社長が大きなくしゃみを連発しているとは、思いもしない私である。

和馬さんの了承を得られたので、社長用にピンクのチューリップが描かれた一輪挿しを二つ買った。一つは社長に、もう一つは片想いしているという女性に使ってもらえたら嬉しい。

色々なイラストがあったものの、見た目にも可愛く、それに和馬さんが教えてくれたピンクのチューリップの花言葉がぴったりだと思い、これに決めた。

ちなみに、花言葉は『誠実な愛』とのこと。社員思いの社長は、きっと、好きな人も誠実な態度で接するはずだから。

お店を出て、私は隣を歩く和馬さんを見上げた。  
「新しい花瓶も社長へのプレゼントも買ったので大満足です。社長、気に入ってくれるといいなあ」

私が笑いかけると、彼もニッコリ笑う。

「ユウカがわざわざ選んでくださったものを気に入らないとなったら、いよいよ蹴り飛ばすしかありませんね」

——その笑顔、なんだか怖いんですけど。

社長が悪寒を感じて震えているとは、先ほど同様に思いもしない私だった。

なんだか和馬さんの周りの空気が冷たくなったので、私は別の話題を口にする。

「え、えっと……、それにしても、パッと花言葉が出てくるなんて、さすがは和馬さんです。誠実な愛、いい言葉ですよねえ。社長は部下にも優しい人なので、きっと片想いが実った時は、彼女さんにもとびきり優しくしてあげるんでしょうね。和馬さんも、そう思いませんか？」

ところが、この話題転換はあまり功を奏さなかった。

「ピンクのチューリップには、もう一つ、代表的な花言葉があります」

「へえ、なんですか？」

彼の言葉に興味津々といった視線を向けると、形のいい和馬さんの目が緩く弧を描いた。

「『愛の芽生え』というものです」

「わあ、それも素敵な花言葉ですね。社長とお相手の間に、早く愛が芽生えたらいいなあ」しかし、はしゃぐ私の横からは、ふたたび冷たい空気が漂ってきた。

「さあ、どうでしょうか。肝心なところでヘタレを發揮する社長の愛の芽は、一生、土から出てこない気もしますが……。愛するユウカが私以外の男性を氣遣うなど、まったく腹立たしいですから、それでもいいでしょう。むしろ、そうあるべきです」

「いや、あの、そんなことを言ったら、社長がかわいそうです。社長にも幸せになってほしいですし……」

引きつった笑みを浮かべる私に、和馬さんはさらに目を細める。

「いざとなったら、私が蹴飛ばしてでも行動を起させますよ。どうぞ、ご安心ください」ことさらいい笑顔で言い切られても、安心できるはずがない。

セレクトショップでの買い物のは、よく行くショッピングモールに向かった。

そこでお昼を済ませてから、あるものを買うため本屋に向かう。



和馬さんには内緒にしていたけれど、結婚情報誌を買いたかったのだ。

今はネットで簡単に知りたい情報を調べられるけれど、『結婚情報誌を買う』ということにずっと憧れていたから。

いつか彼氏ができて、その人と結婚することになったら……という夢を、思春期を過ぎた辺りから抱き続けてきた。

それがついに叶い、念願の雑誌を堂々と手に入れることができる。

——はあ、今日まで長かったなあ。

学生時代に友達と、『結婚するなら、こういう人がいいな』、『新居は、こんな感じで』などと話し合っていた頃が懐かしい。

ニヤケそうになる顔を必死に引き締めながら、私は足を進める。

昼時ということもあり、本屋は比較的空いていた。

いつもの私なら、料理本コーナーやファッション雑誌のコーナーに向かう。

普段とは違う場所へと進む私に、隣を歩く和馬さんが声をかけてくる。

「ユウカ、今日はどのような本を買うのですか？」

問いかけられたのは、ちょうど目的の場所に着いた時だった。

私は繋いでいた手を解き、テレビでよく宣伝されている雑誌を取り上げた。かなり大判で分厚い雑誌を、彼に向かってオズオズと差し出す。

「……これです」

表紙には結婚に関する文字がたくさん書かれていて、中央には真っ白なウエディングドレスを着た女性が写っている。

男性の和馬さんはこの雑誌を知らないかもしれないが、表紙を見たら、これがどういったものなのかピンとくるはず。

これまでの私は和馬さんの後をくつついていく感じだったけれど、彼のことを一生支えていこうと決意してプロポーズした日から、ちよつとずつ進歩している。こんな風に、結婚について積極的に考えられるようになったのだ。

「知らないことだらけなので、今のうちに勉強しようと思ひまして。たぶん、準備することがたくさんあるでしょうし」

エへへと照れ笑いを浮かべた瞬間、ものすごい力で抱き締められた。

「うわあっ」

私は咄嗟に雑誌を胸に抱き込み、皺にならないようにガードする。

そんな私に構うことなく、和馬さんがギユウギユウと腕の力を強めた。

「ああ、ユウカ。最近のあなたは行動力に溢れていて、惚れ直してしまいます」

たかが結婚情報誌を買って来ただけなのに、和馬さんはやたらと感動してくれている。過去の私は結婚に対してかなり尻込みしていたので、感動する彼の気持ちも分からなく



はない。

喜んでくれたことはありがたいものの、ここは大型ショッピングモール内の本屋。混雑していないとはいえ、人の目はあるのだ。

おまけに結婚情報誌コーナーは店内でも目立つ位置にあり、通路を行きかう人たちにも丸見えだった。

遠巻きに私たちを見ている女性のお客さんたちが、「きゃー!」、「なに、ドラマの撮影!」などと、にわかになわつき始める。

「か、か、和馬さん、放してください!」

ジタバタ暴れると、彼もここがどこなのか思い出したようで、すぐに腕を解いてくれた。「すみません、つい」

「いえ、その、怒っているわけじゃなくて、恥ずかしいだけです。じゃ、じゃあ、これ、買ってきますから!」

頭の天辺から湯気を出しているような気分で、私はその場から駆け足で逃げ出した。

夕飯用の食材を買い物してから、和馬さんの部屋に戻ってきた。

時間は十六時を過ぎたところなので、ご飯を作り始めるにはまだ早い。

ということ、リビングで雑誌を読みながらノンビリすることにした。

ソファに腰を下ろした私は、今日買ってきた雑誌を膝の上に載せ、手の平で撫でる。

——この私が、こういう雑誌を買う日が来るなんて、一年前は想像もしていなかったなあ。

そんなことを心の中で呟きながら、隣に座る和馬さんを見上げた。

「どうしました?」

優しい微笑みを浮かべた彼が、右腕で私を優しく抱き寄せる。

「まともにお付き合いをしたことがなかった私が、まさかこの雑誌を買うなんてビックリだなと思っていたんです」

結婚どころか、恋愛すらも縁遠いと思っていた。その私に、将来を誓い合う素敵な彼氏ができただのだ。本当に、人生とは分からない。

「そろそろ、具体的に動いたほうがいいですよね」

私が言うと、和馬さんが大きく頷く。

「式場の予約など、結婚式までにやらなくてはいけないことも、色々あるみたいですよ」  
彼も雑誌の表紙に視線を落としたりした。そこには、「準備」や「マナー」に関する見出しが躍っている。

「そうですね、式場が決まったら、料理や引き出物も決めなくちゃ。あと、ドレスの試着もありますよね。もちろん、和馬さんのタキシードも」

衣装については、私よりも彼のほうが大変そうだ。

小柄ではあるものの、私の身長はそこまで平均から外れていない。どうしても丈が合わない場合は、ハイヒールで誤魔化すという手もある。

しかし日本人にしてはかなり長身の和馬さん。合うサイズが、ちゃんと見つかるだろうか。

裾や袖が短いからといって、生地を付け足すわけにはいかないのだ。

そんなことを考えていたら、和馬さんがグイッと私を引き寄せた。

「式場を選ぶこともそうですが、その前に大事なことがあります」

「なんですか？」

見上げると、これまで穏やかだった彼の表情が心なしに引き締まったもの変わる。

「ユウカのご両親に、改めてご挨拶しませんと」

彼が言いたいことが理解できなくて、私はきょとんとしてしまふ。

「すでに済ませたのに、改めてするんですか？」

そんな私に、和馬さんは真剣な表情のまま口を開いた。

「以前伺ったのは、結婚を前提にした付き合いをしているという報告が目的でした。ですから次は、『ユウカさんをください』と挨拶をしなくては」

「えっ？ あっ、そ、そうですよねっ」

お互いの親と顔を合わせたことですっかり安心していただけけれど、結婚にあたってそれでおしまいというわけにはいかない。

普段の両親の様子からは、和馬さんとの交際を反対しているようには見えない。それどころか、美形な上に礼儀正しい和馬さんを母は大層気に入っているから、諸手を上げて熱烈大歓迎だろう。

父も終始呆気に取られた感じだったけれど、あれはたぶん、私にこんなにも素敵な彼氏ができただけに驚いていただけだと思う。はっきり反対されたこともないので、こちらは大丈夫のはず。

とはいえ、結婚とは家同士の付き合いの始まりでもあるから、まずは親に許可をもらうべきなのである。

「あなたのご両親にお会いした時には私たちの結婚に反対はしないように感じましたが、やはりはじめは必要でしょう。まして、あなたは一人娘です。ご両親にとって、大事な挨拶になるはずですよ」

「はい」

コクリと頷き返す私に、和馬さんは少しだけ表情を緩めた。

「それでは、ご両親の都合を訊いておいてもらえますか？」

「分かりました。えっと、それじゃあ、私も和馬さんの家へ挨拶に伺ったほうがいいで

すよね?」

定番の挨拶は、さつき和馬さんが口にしたような『お嬢さんを、僕にください』といった感じで、彼女側の親に許可をもらう意味合いが強いだろう。

だけど、結婚とは二人でするものだから、彼氏側へも挨拶が必要な気がする。こういう場合、彼女の実家が先だろうか。彼氏の実家が先だろうか。

あまり聞かない話なので、実際にはどうなのか見当もつかない。  
そう問いかけたら、和馬さんが苦笑を零す。

「まずはユウカのご両親に挨拶を済ませて、結婚の許可をいただいてからにしましょう。私の家族はあなたとの結婚に反対しませんから、報告をするだけで構いません」

そういえば、初めて和馬さんのお家を訪問した時には、すでにお母さんからお嫁さん認定されていたっけ。

和馬さんの入院中にも、お母さんからは『そばで支えてほしい』と頼まれたし、彼が言うように問題はないかもしれない。

たとえ反対されたとしても、認めてもらえるように頑張るつもりだけだね。

恋愛ときちんと向き合うことから逃げてばかりいた私は、もうどこにもいない。和馬さんの隣を笑顔で歩いていけるように、前を向いて進むのだ。心の中で、密かに拳を握る。

「夕食を作る前に、親に電話しますね。和馬さん、近々休日出勤の予定はありますか?」

「いえ、ありませんよ。急に出勤することになったとしても、土曜か日曜のどちらかは都合がつくはずですよ」

そう言うことから、和馬さんの表情が大きく綻んだ。

「こうして、少しずつ結婚に向けて進んでいくんですね。この私に結婚の許可をいただく挨拶に出向く日が来るとは、夢にも思いませんでした」

彼が静かな口調で告げた様子が、妙におかしかった。

思わず笑ってしまうと、彼が不思議そうに首を傾げてみせる。

「なにを笑っているのですか?」

肩を震わせて笑う私は、その理由を素直に話す。

「和馬さんなら結婚相手に困らないのに、そんなしみじみ言うから。それが、なんだかおかしいなって」

私と知り合う前のモテっぷりは留美先輩から聞かされていたし、付き合ってからも相変わらずモテモテだ。そんな彼なら、結婚相手はよりどりみどりだったはず。

すると、和馬さんが切れ長の目を柔らかく細めた。

「結婚どころか恋愛にさえも興味をなくしていましたので、いくら言い寄られたところで無意味だったのですよ。それは、ユウカも知っていますでしょう? あの時は、本当に申し訳ありませんでした」

確かに、そういう彼の姿は、記憶喪失で入院した初日に思いがけず知ることになった。あんな風に、女性を切って捨てる和馬さんなのだ。『恋人ができたらこういうことをして』、『結婚したらあんなことをして』と夢は見ないというのも納得できる。

それを思い出し、私はさらにクスクス笑う。  
「いいえ、今となつては笑い話ですし、私と出逢ったことで和馬さんが変わったのも分かったので、気にしていません」

左にいる和馬さんに、ガバツと抱き付いた。

突然のことに驚いた様子もなく、逞たくましい和馬さんは難なく私を受け止める。

それどころか素早く私を膝の上に乗せ、よりいっそう密着してきた。

「あなたと出逢う前の私が見たら、さぞかし驚くでしょうね」

「それ、私も同じですよ」

顔を近づけ、微笑みを交わし合う。

「お互い、予想もしないことになるなんて……。数え切れないほどの偶然が重なって、私たちは出逢ったんですね。彼氏ができて、その人と結婚するなんて、本当に夢のようですよ」

私の言葉に、和馬さんが深く頷く。

「互いの両親や、それ以前の世代の出逢いがあったからこそだと考えたら、本当に奇跡

的なことですよ。どこかでほんの少しでも違っていたら、私たちは顔を合わせることもなかったでしょう」

和馬さんが隣にいない人生は、もう考えられない。恋人になれないどころか、逢うこともなかったとしたら、私の人生はどれほど色のないものだったのだろうか。

「ふふっ、和馬さんに逢えてよかったなあ」

笑いながら、コツリとおでこをぶつける。

「ええ、この巡り合わせに感謝しています」

私たちは出逢えた奇跡に改めて感動しながら、胸がくすぐったいような甘いひと時を過ぎ過ぎした。

## 2 嬉し恥ずかし結婚準備

結婚の許しをもらおうという話が出た二週間後の土曜日。私の両親に会う時間が取れたので、昼食に合わせて二人で実家へと向かうことにした。

アパートへ迎えに来てくれた和馬さんは、前回同様にスーツ姿だ。だけど、気合いの入りが違うように感じる。

いつもと違い前髪を上げておでこを見せるヘアスタイルは、誠実さと清潔感がよく表れている。ネクタイの結び目も、普段よりかっちりしているような気がした。もちろん、ピカピカに磨き上げられている靴にも、彼の気合いがしっかりと感じられる。それだけ、今日の挨拶を大事に考えてくれたことが伝わってきた。そういう彼の気持ちだが、本当に嬉しい。

玄関先で彼を出迎えた私の顔は自然と緩むが、それと同時に気が引き締まる。

和馬さんのように、私も誠実な態度で、彼の家族に向き合いたい。

そんな決意を新たにして、私はアパートを出た。

和馬さんを連れて実家に行くと、笑顔の母が出迎えてくれる。

「いらつしゃい。さあ、上がって」

ニコニコと笑っている母だけど、その表情はどこかぎこちない。どうやら、緊張しているらしい。

電話では『週末に時間を取ってほしい』としか伝えなかったものの、和馬さんがなんのために来たのかは察しているようだ。

普段呑気な母でさえ緊張しているのだから、父はさらに緊張しているだろうと予想していたら、その通りだった。

リビングのソファに座っている父は、新聞を広げてくつろいでいるように見える。休

日の父は、いつもこういう感じだった。

しかし、忙しくなく何度も脚を組み替えているのだ。おまけに、やたらとお茶を口に運んでいる。

自分の父親が見せる一面を可愛いと思いつつ、きちんと向き合ってくれることに感謝するばかりだ。

ほら、よく聞くでしょ。「娘はやらん！」とか言つて、早々に彼氏を追い返す父親がいるって。

私は一人娘で、しかも短大卒の社会人二年目。結婚なんて早いと怒鳴られても、おかしいことではない。

いや、これまでに恋愛の『れ』の字もなかった娘だから、反対に『よくぞ、もらってくれた！』と感謝している可能性もあるかも。とりあえず、とげとげしい雰囲気ではないことはありがたい。

母に連れられてやってきた私は、父に声をかける。

「お父さん、来たよ」

私に視線を向けた父の表情がふいに柔らかくなったものの、背後に立つ和馬さんの姿を目にして、ふたたび表情を硬くした。

とはいえ、その変化は和馬さんに対する嫌悪や拒絶ではなく、緊張から来るものだと

予想できる。

私がりビングに足を踏み入れると、和馬さんが頭を下げた。

「お邪魔いたします」

その挨拶に、父は静かに頷いただけ。これも、緊張ゆえのものだ。決して、「お前なんかと、口をきいてたまるか！」ではない。

「さあ、二人とも座って。まずは、お茶にしましょう」

私たちは母の勧めで、ローテーブルを挟み父の向かいのソファに腰を下ろす。

全員の前にお茶を置いた母が父の横に腰かけた時、おもむろに和馬さんはソファから立ち上がった。

——あれ？ 車に忘れ物でもした？ 仕事の電話がかかってきたわけでもなさそうだし。

車から下りる時、手土産やバッグはちゃんと持ったはず。

それに社長には今日のことを話してあるので、よほど緊急でもない限り、連絡はないだろう。

どうしたのかと思っているうちに和馬さんはその場から少し横にずれ、父と母に自分の全身が見える場所で正座をする。

突然のことに、両親も私も驚いた。

「あ、あの、どうしたんですか？」

声をかけたものの、和馬さんは視線をまっすぐ両親に向けたままである。

皆が目を丸くする中、背筋を伸ばして正座をしている彼が静かに口を開く。

「先日引き続き、お時間を作ってくださいまして、ありがとうございます」

床に手をつき、彼は綺麗にお辞儀をした。和馬さんは剣道の有段者なので、堂に入った姿だ。こんなに美しいお辞儀は、見たことがない。

頭を下げた状態でたつぷり時間を置いてから姿勢を戻した彼は、静かな口調で話を続ける。

「今日は、ユウカさんとの結婚の許可をいただきたくて、こちらへ伺いました」

和馬さんは一呼吸置いてから、ふたたび口を開いた。

「私にとって、ユウカさんはなによりもかけがえない、大切な存在です。彼女が隣にいない人生は、私には考えられません。私と一緒にいることで幸せだと思ってもらえるように、精いっぱい努力をいたします。どうか、私との結婚を許していただけませんか」

穏やかな声だけど、真剣な表情とピシリと伸びた背中が、彼の本気を物語っている。

これまでに優しく甘い愛の言葉をたくさん伝えてもらったし、何度も結婚したいと言われてきた。

「……ありがとう」

声はわずかに震えていて、心なしか目も潤んでいる。

「ユウカを、私たちの娘をそんなにも大切に想ってくれて、本当にありがとう」

その言葉に、母が続く。

「娘はいつか嫁ぐものだと、ユウカが生まれた時から分かっていたんだけど。やっぱり実際にそのセリフを聞くと、思った以上に感動するわねえ」

父は、大きく頷いた。だけど、俯いたまま、一向に顔を上げようとはしない。

「もう、お父さんたら、感激しちゃって。今からそんな調子じゃ、結婚式で号泣するんじゃないかしら。ハンカチ、たくさん持って行かなくちゃね」

しみりした空気を和ませようと、母があえておどけた声を出した。それから、パンと手を打つ。

「さ、食事にしましょうか。ユウカ、手伝って」

「え？ でも……」

私が席を立つと、和馬さんと二人きりにされた父が戸惑ってしまうのではないだろうか。どちらかというと、父は口下手だから。

父と和馬さんの顔を交互に見る私の腕を、母がガシツと掴む。

「大丈夫よ、いらっしやい」

母の笑顔に促され、私はキッチンへと向かった。

「お父さん、大丈夫かなあ」

和馬さんは心配りの達人だから、ぎこちない様子の父ともうまく会話できるだろう。それでも、ついつい心配になってしまう。

——しかし、それは私の杞憂だった。

母の話だと、前回父は驚いてろくに話ができなかったけれど、和馬さんが来てくれたことを喜んでいたらしい。

なんでも、父はずっと息子もほしかったとのこと。だから、いずれ私が結婚して和馬さんが義理の息子になってくれる日を、心待ちにしていたようだ。

その証拠に、私がキッチンから戻ってくると、かなり和やかな雰囲気二人は会話し



ていた。しかも、いつの間にか「和馬君」と呼んでいる。

結婚を許してもらえて、和馬さんの存在を父が受け入れてくれて。

そのことが、改めて私の胸を熱くした。

無事に結婚の許可をもらった私たちは、その足で和馬さんの実家に向かった。

この前と同じようにリビングには美形家族が勢揃いしていて、その光景にはやはり圧倒される。

顔もスタイルも平凡な私は、彼らの間に入ると完全に埋没まいぼつしてしまう。仕方がないと分かっていても、ちょっと落ち着かない。

それでも、皆が私を優しく受け入れてくれたのは以前と同様でありがたい。

「今日のワンピースも、よく似合ってるな」

「本当ね、ユウカちゃんの可愛らしさが引き立っているわ」

「ねえ、後で俺とデートしてくれない？ 可愛いユウカちゃんを、周りに見せびらかしたい」

「お願い、ユウカちゃんの写真を撮らせて！」

和馬さんのお兄さん、お姉さん、弟さん、妹さんが、一斉に私を取り囲んだ。まるで、人懐っこい大型犬たちにじゃれつかれているような気分になる。

嬉しいけれどビックリの歓迎に硬直していたら、和馬さんがすかさず私を彼らの輪の中から救出してくれた。そして、ギュッと腕の中に抱き込む。

「ユウカが可愛いのは、いつものことです。彼女は、なにを着ても似合いますからね」

得意気に言い放った和馬さんは、左腕を伸ばして弟さんの頭を小突いた。

「ユウカは私の恋人ですので、私以外の男性とはデートさせません」

「……ちえ、ケチ」

ボソリと呟つぶやく弟さんの頭を、和馬さんがまた小突く。

「ケチで結構です」

そんなやり取りをしている中、苦笑しているお母さんが割って入ってきた。

「もう、あなたたちはユウカさんに構い過ぎよ。少しは大人しくしないと、この家に来てくれなくなるわ」

この言葉を合図に、私たちはようやくソファに腰を下ろした。

それぞれが座ったところで、彼のお父さんが口を開く。

「あちらのご両親に、失礼はなかっただろうな？」

やや強張った声で尋ねてくるお父さんに、お母さんも心配そうな視線を和馬さんに向けた。

「和馬のことだから大丈夫だと思っけど、ユウカさんは一人娘だもの。結婚するとなっ



たら、ご両親も色々考えるでしょうし。特に、ユウカさんのお父様は」

そんな二人に、和馬さんが微笑みかけた。

「きちんと許可をいただきましたよ」

それを聞いて、リビンダに漂っていた緊張が一気に解ける。

「そうか」

（つぶや）

一言呟いたお父さんが私に向き直り、ピシッと背筋を伸ばしたのちに頭を下げてきた。「コイツは融通が利かなくて、厄介なところも多いだろう。苦勞を掛けるだろうが、ユウカさん、和馬をよろしく頼む」

すると、お母さんも頭を下げてくる。

「記憶喪失になった和馬を見て、この子にはユウカさんが必要だっつづく分かったわ。この先もあれこれ面倒を起こすでしょうけど、どうか見捨てないでやってね」

二人に深々と頭を下げられ、私は盛大に慌てた。

咄嗟にソファから滑り降り、さっきの和馬さんのように正座して頭を下げる。

剣道もなにも経験がないので、その所作は正直、不格好なものだろう。それでも構わず、床におでこを擦り付ける。

「い、いえ、そんな！ 私のほうこそ、不束者ですが、よろしくお願いします！ 和馬さんを幸せにしますから、息子さんを私にください！」

勢い余っておかしなことまで口にしながら平伏していると、お腹の脇から和馬さんが腕を突っ込み、ヒョイツと私の上半身を起こした。

「ユウカが頭を下げる必要は、いっさいありません。不束者だなんて、とんでもない。あなたほど素晴らしい女性は、世界中どこを探してもいませんよ」

そう言うてさらにグイッと私の体を引き寄せた和馬さんは、ポスンとソファに腰を下ろした。……私を膝の上に乗せて。

——ひやああ、やめて、やめて！

恥ずかしさでジタバタともがいていたら、お兄さんとお姉さんがニヤニヤと楽しそうに笑みを浮かべてくる。

「鉄仮面と言われていた和馬が、こんなに可愛い彼女を捕まえやがってよ。しかも、結婚を考える日が来るなんてなあ」

「さんさん周りから、表情筋が死んでいると言われていた和馬なのにねえ。見てよ、あのだらしなく緩んだ顔。信じられないわあ」

その二人に、弟さんと妹さんも大きく頷く。

「うはあ。和馬兄ちゃんって、湖愛体質だったんだ。人前で彼女を膝抱っこなんて、俺だったらできねえよ」

「いいなあ、私もユウカちゃんを抱っこしたい！」

——どうして、誰も和馬さんを咎めないの!? おまけに、妹さんが私を抱っこした  
 いて、どういうこと!?

「か、和馬さん、下ろして!」

羞恥心が限界を超えて泣きそうになると、お父さんとお母さんがやっと和馬さんを宥める。

「仲がいいのは結構だが、やりすぎるとユウカさんに嫌われてしまうぞ。結婚を反故にされてもいいのか?」

「そうよ。和馬つて、本当に極端な子ね。これまで彼女を連れてきたことさえなかったのに、ユウカさんにはそんなことをして……。いい歳なんだから、時と場所を考えなさい」  
 親に言われ、ようやく和馬さんが私をソファに下ろしてくれた。ふう、やれやれだ。

私はソツと息を吐き、胸を撫で下ろす。

その手を膝の上に置いたら、和馬さんが握り締めてきた。

膝の上に乗せられるよりはいいものの、十分恥ずかしい。

手を引き抜こうと力を入れたら、キュツと握られる。

だけどそれは一瞬のことで、皆に気付かれる前に解放された。一応、お母さんの言い  
 つけを守るつもりはあるようだ。

チラリと隣を窺うと、和馬さんが小声でささやいてくる。

「すみません。ユウカから幸せにしますと言っていただけなのに、ものすごく感激  
 てしまい」

嬉しそうな顔でそんなことを言われたら、強くは言い返せない私だった。

私の両親が結婚を許してくれたという報告をしてお暇するつもりだったのに、話が盛  
 り上がって長居してしまった。その上、夕食までごちそうになることに。

申し訳ないと委縮する私に、お母さんは「もともとそのつもりで、準備はしてあるの  
 よ」と優しく言ってくれる。このお母さんとなら、うまくやっていけそうだ。

美味しくて心が温まるお料理を堪能しながら、皆とおしゃべりを楽しむ。その空間に  
 は、ちゃんと私の居場所があった。

「ユウカちゃん、唐揚げ食べる? 俺、取ってやるよ」

「ありがとうございます」

お兄さんが大皿に盛られた唐揚げを、取り皿によそって差し出してくれる。

「ユウカちゃん、パプリカは食べられるかしら? 私、パプリカのピクルスが得意で、  
 よく作るのよ」

「はい、平気です」

お姉さん特製のピクルスに、舌鼓を打った。